

「イスラエル建国史」

14 アリヤの人々 ユダヤ・中東研究家 滝川 義人



滝川 義人
Takigawa Yoshito

1937年長崎県生まれ。早稲田大学第一文学部卒業。イスラエル大使館チーフ・インフォメーション・オフィサー（1968～2004）として勤務。

現在、MEMRI（メモリ、中東報道研究機関）日本代表。ユダヤ、中東研究者。

主要著書：『ユダヤ解読のキーワード』（新潮社）、『ユダヤを知る事典』（東京堂出版）など多数。

や「アメリカのヘブライびと」(American Hebrew) に民族として生きる権利の表明とシオニズムの出現を予感する熱い心が綴られている。

◆ 1904年に始まった第2アリヤ（～1914年）により、エレットイスラエル（イスラエルの地）には約4万人が定着した。その中には、初代首相となるダビッド・ベングリオン、第2代大統領イツハク・ベンツビ、第3代大統領ザルマン・シャザル、第2代首相モシエ・シャレットなど、有為の青年たちがそろっていた。この時代、シオニズム運動は実践主義に転換し、キブツや組合、労働運動など、イスラエル社会の基盤が成長を始める。

第1アリヤから第2アリヤまでの間

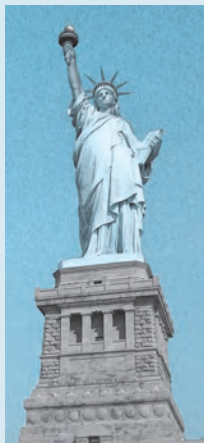
第1アリヤ（1882～1903）から第2アリヤ（1904～1914）までの間に、ロシア/ポーランド、ルーマニアそしてガリチア地方（カルパチア山脈の北方域）から、250万のユダヤ人が流出した。イスラエルの地（エレットイスラエル）には約8万が移住した。正確な数字がないのは、生活苦に耐えかねて再流出した人もいたためである。第1次世界大戦勃発前の段階で、当地のユダヤ人口は9万弱になった。

ユダヤ人の主な移住先（1882～1914）

アメリカ	2,031,400
カナダ	105,800
アルゼンチン	112,615
ブラジル	9,750
南アフリカ	44,377
エレットイスラエル	8万弱

女流詩人エマ・ラザルス

ニューヨーク湾内のリバティ島（旧ベッドロー島）に自由の女神像が立っている。そしてその台座には、新コロサス（The New Colossus）と題するソネット（14行詩）が刻まれている。「来れ。疲れ果て貧困にうちのめされ、自由な空気を求めて身を寄せ合う人々よ。来れ。嵐に翻弄



された寄せ居る人々よ。私は、黄金の扉の傍らでランプを掲げています」。要訳すれば、このような意味の詩である。作者はユダヤ人の女流詩人エマ・ラザルス（1849～1887）である。

コロサスは世界7不思議の一つで、古代ギリシアの太陽神ヘリオスの青銅像。高さが30メートルあり、ロードス島に建てられていたという。

ラザルスはスファルディ系の両親を持ち、ニューヨークで生まれ育った。十代の頃から詩作を始めているが、1880年代にロシアで発生したボグロムに衝撃をうけ、同胞の窮状に心を痛めた。そして、ユ

ダヤ人だけでなく宗教上の迫害や経済的圧迫の犠牲者である「身を寄せ合う人々」を守る聖域が必要という思いを、このソネットに託したのである。一方ラザルスには、「セムびとの歌」（Songs of Semite 1882）や「バビロン川の水辺にて」（By the Waters of Babylon 1887）といった詩集があるが、エッセー「世紀」（The Century）



エマ・ラザルスの詩
（出典：statueliberty.net）

夢の地北米アメリカ

抑圧的環境から出て行くというやむを得ない事情があったとはいえ、新天地に自分と家族の将来を託した人々は、それぞれの到着先で才能を発揮する機会に恵まれた。ノーベル賞級の仕事で世界に知られる人材を輩出するのは、この時代からである。

ほとんどの人が夢見たのは、やはり北米特にアメリカであった。アメリカへの移住は3段階に分かれる。最初に上陸したのは、スペイン、ポルトガル系のユダヤ人で、1654年にニューアムステルダム（現ニューヨーク）に到着したマラノである。異端審問を逃れ、ブラ



ジルから来た人々であった。スペイン、ポルトガル出身のスファルディ系は、アメリカが独立宣言を出す頃、1,500人ほど居住していたといわれる。

次の移民の波はドイツからで、ナポレオン戦争（1796～1815）後にアメリカへ来るようになった。教育水準の高い人々である。その後にくるのが第3の波、すなわちロシア/ポーランドを初めとする東欧圏のユダヤ人たちであった。1880年時点でアメリカのユダ

ヤ人口は28万になっていたが、この後移民が急増するのである。アメリカへの移住は1924年に割り当て移民法（日本では排日移民法と呼ばれた）が導入され、ユダヤ人移民は急減するが、その前にユダヤ人の一番多い国はアメリカになっていた。

アルゼンチン移住

ヒルシュがユダヤ人入植協会(ICA)を作って推進したアルゼンチン入植事業は、希望者が少なくなり、結局3万人ほどの入植にとどまった。アルゼンチンに農耕社会を作って、ユダヤ人問題を解決するヒルシュの夢は、挫折したのである。



パロン・ド・ヒルシュ

しかし、1904年に始まるポグロムで、ヒルシュの名は、アメリカと同様暗い過去に決別する希望のシンボルとして、再浮上してくる。ヒルシュが新天地アルゼンチンの魅力を大いに宣言し、それがロシアのユダヤ人の脳裏に深く刻みつけられていたのである。移住者は家具、ニットウェア、事務用品などを扱う中小企業に従事する人が多く、圧倒的の大多数は低中間層に属する人々であった。

ヨセフ・トルンペルドール



テルハイのライオン像

イスラエル北部のテルハイに、咆哮するライオン像が立っている。ヨセフ・トルンペルドール(1880～1920)と同志5名を記念する石像である。ト

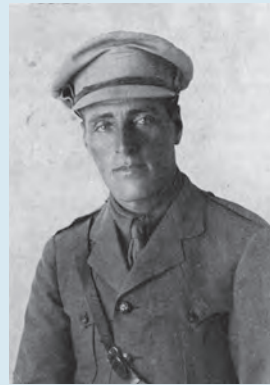
ルンペルドールはこのテルハイでアラブの襲撃隊と戦って死亡したが、開拓と自衛を組み合わせたパイオニア運動(ヘハルーツ)の推進者として知られる。トルンペルドールは、帝政ロシア軍でユダヤ人として最高の階級(予備役2等中尉)に達した軍人で、第2アリヤでエレットイスラエルへ移住したのである。

ロシアで不穏情勢が続く、まさにポグロムが発生しようとする頃に生まれたのが、ヨセフ・トルンペルドールであった。生地はピアチゴルスク。父親はカンタニスト(少年兵)として少年時代にユダヤ人社会から強制的に引き離されて成長したので、その父親を持つヨセフは、ユダヤ教はもとよりユダヤ人の伝統がない家庭で生まれ育った。

しかし、ユダヤ人子弟に対する入学制限などさまざまな制度的慣習的ユダヤ人差別に直面し、トルンペルドールは次第にシオニズムへ傾倒していく。

トルンペルドールは、1902年に徴兵にとられ、2年後に勃発した日露戦争で、旅順攻防戦に投入され、負傷した。片腕を失ったが前線復帰を願っている。しかし1905年1月に旅順は陥落し、トルンペルドールは、多数のロシア兵と共に捕虜となり、日本の高石捕虜収容所へ送られた。

トルンペルドールは、日本軍と戦かい、日本社会と接するうちに、大国ロシアは武力に劣る小国日本になぜ負けたのか、民族の力がどこから生まれるのかを考え、一つの結論に到達する。日本国民の高い士気と規律、そして組織力が小国日本の勝因である。これがその結論であった。弱小民族にも生存する権利がある。弱小であっても、目的を貫き通す強い意志と組織力があれば、必ず立ち直れる、とトルンペルドールは、確信するに至ったのである。そして、所内に学習班を作り『ユダヤ的生き方』(Yevreskaya Zhijn)を編集し、ユダヤ系兵士用の教材に使った。



ヨセフ・トルンペルドール

1912年、トルンペルドールは、サンクトペテルブルグ大学を卒業すると、イスラエルの地へ移住した。彼が活動するのはこの後の時代であるが、民族の生存権を守るには、武力のみならず国民の士気、規律、組織力が必要とする認識は、そのあと誕生

するイスラエルのバックボーンの一つになった。

ユダヤ人に理解があるという人たちの話を詳しく聞くと、打ちのめされ哀れみを請うユダヤ人には同情するが、生存権を主張し、その権利が侵害されると敢然として立ち上り、抵抗するユダヤ人は嫌いという人が多い。イスラエルが自衛権を行使すると、迫害された者が迫害すると、嫌味を言うのである。

ユダヤ人がポグロムで被害にあっても、誰も助けてくれなかった。自分にも生きる権利があり、その権利を侵されたら抵抗する権利もある、と考える人たちが出てくるのは当然である。1907年、ハイファにバルギオラという自警団が設立され、2年後にその発展的組織ハショメル(夜警の意)が誕生した。組織者は前出のイツハク・ベンツビのほか、イスラエル・ギラディ(1886～1918)、イスラエル・ショハット(1886～1961)、アレクサンドル・ザイド(1886～1938)など第2アリヤの人々であった。



イツハク・ベンツビ
(第2代大統領)